

# シェーラブ・ギェンツェンの伝記 『昔の教え』について

三宅伸一郎

## 1. はじめに

仏教とならぶチベットの宗教であるボン教<sup>①</sup>の寺院に行くと、ツォンカパ (Tsong-kha-pa Blo-bzang grags-pa, 1357-1419) そっくりの尊像を目にする。パーシャ (pad-zhwa) とよばれる独特の青い帽子を被っていることのみで識別可能なこの人物が、シェーラブ・ギェンツェン (Shes-rab rgyal-mtshan)<sup>②</sup>である。東チベット・ギャロン (rGyal-rong) 地方出身の彼は、ツァン地方トプギェー (Thob-rgyas) 谷にあり、現在でもボン教の総本山的存在であるメンリ寺の建立者である。清浄な戒律を守る教団の基礎を築いたという意味で、チベット仏教におけるツォンカパの役割に比すことができる。「ニヤムメー (mnyam-med, 並ぶべき者の無い者)」あるいは「ギェルワ・ニーパ (rgyal-ba gnyis-pa, 第2のブツダ)」と称せられ、教師・シェンラブ (sTon-pa gShen-rab) とならび、ボン教史上、最も重要な人物とされている。

にもかかわらず、彼に関する本格的な研究はいまだなされていない。それは、最も重視すべき資料である伝記 (rnam-thar)<sup>③</sup>が得られないからであった。

ところが状況は、近年一変した。1998年のボン教テンギェル (brten-'gyur) 刊行によってである。この一大叢書には、これまで見ることでできなかった、ボン教歴代高僧たちの伝記が数多く収められている。シェーラブ・ギェンツェンの伝記としては、3種のもの—それぞれ2つの異写本を収録—が収められている。

筆者はこの間、シェーラブ・ギェンツェン伝研究の基礎的作業として、上

## 2 (三宅)

記テンギユル所収の伝記の校訂テキスト作成作業を進めている。本稿で紹介するのは、その中の『昔の教え』と題するテキストである。この間、チベット在住の複数のボン教僧から協力を得たが、これは、彼らのすべてが「これまで見たことがない (mjal ma myong)」と口をそろえるテキストである。

### 2. 『昔の教え』

『昔の教え』は、その正式なタイトルを

*sKu-mdun rin-po-che mnyam-med shes-rab rgyal-mtshan gyi rnam-thar gna'po'i zhal-lung* 無比なるお方シェーラブ・ギエンツェン・リンポチェ御前の伝記「昔の教え」

という。テンギユル第152, 203巻にそれぞれ別の写本が収められている。前者をA, 後者をBとして、その書誌的データを以下に示す。

A テンギユル第152巻所収, 10葉, 6行立て, ペイク (dpe-yig) 書体。

B テンギユル第203巻所収, 14葉, 5行立て, ペイク (dpe-yig) 書体。

コロフォンは、非常に読みにくい。四川省ゾルゲ (mDzod-dge) 県アキー・キャンツァン (A-skyid sKyang-tshang) 寺のティメー・オエセル (Dri-med 'od-zer) 師の読みを参考に、以下のように解釈した。[A: 9b5-, B: 13b5-]

gna' bo'i zhal lung rna<sup>(1)</sup> ba'i bdud rtsi 'di/  
nub par phangs<sup>(2)</sup> nas blo gsal dga<sup>(3)</sup> bskyed phyir/  
bon dga' gshen gdung<sup>(4)</sup> mi ldog dad pa'i blos<sup>(5)</sup>/  
yi ger spel 'di mthong thos<sup>(6)</sup> sangs rgyas shog/

(1) B: mam (2) A, B: nus par 'phang

(3) B: dga' pa (4) A, B: gdungs

(5) A: mi dad pa yi blos (6) A, B: thong

この「昔の教え・耳の甘露」は、

(教えが) 衰退するのを惜しみ、(人々が) 賢くなり喜びを起こすよう、  
ボンを好み、シェンを愛する顛倒せぬ信心をもって文字にあらわした。  
これを見る者聞くものが成仏せんことを<sup>(4)</sup>。

残念ながら著者名および著作年代は記されていない<sup>⑤</sup>。

以下に、テキストの梗概を示そう。

- (1) 生誕地ギャロン地方テクチョク (sTegs-lcog), 父: タクラ・ルギェル (Brag-ra klu-rgyal), 母: リンチェン・メン (Rin-chen-sman), 丙申年生まれ, 俗名: ユンドウン・ギェル (g-Yung-drung rgyal), 3人兄弟の次男。[A: 1b2-, B: 1b3-]
- (2) 幼少の頃, 父より「原因のボン (rgyu-bon, 占いやお祓いなど)」を学んだ。[A: 1b5-, B: 2a2-]
- (3) 父母と再会することを約束し, 僧院を巡る修行の旅 (grwa-skor) に出た。[A: 2a1-, B: 2a4-]
- (4.1) ユンドウン・ギェンツェン (g-Yung-drung rgyal-mtshan) のもと出家, 僧名・シェーラブ・ギェンツェンを授かった。[A: 2a3-, B: 2b1-]
- (4.2) ポツェ・イエシェー・ギェンツェン (Pho-rtse Ye-shes rgyal-mtshan), 持明者シェーラブ・ロドゥ (rTogs-lidan Shes-rab blo-gros), ナリンパ・クンサン・ギェンツェン (Na-ring-pa Kun-bzang rgyal-mtshan) より教えを受けた。[A: 2a5-, B: 2b3-]
- (4.3) ツルティム・イエーシェー (Tshul-khrims ye-shes) よりタンソン戒 (仏教の比丘戒に相当) を受けた。[A: 2b1-, B: 2b5-]
- (4.4) リンチェン・ロドゥ (Rin-chen blo-gros<sup>⑥</sup>) より, 内外秘密のルン (lung 読みによる教えの伝承) を受けた。[A: 2b2-, B: 3a1-]
- (5) 31才の時, イェール・エンサカ (g-Yas-ru dBen-sa-kha<sup>⑦</sup>) 寺に入る。エンサカ寺の規模の描写。[A: 2b5-, B: 3a5-]
- (6) ナーランダ寺で, ロントン・シェーチャ・クンケン (Rong-ston Shes-bya kun-mkhyen) より他部 (gzhan-sde = 仏教) の教義学を学んだ。[A: 3a4-, B: 4a2-]
- (7) イェール・エンサカ寺で説教, 弟子を教化。[A: 3a5-, B: 4a3-]
- (8.1) 父母に会うため, リンチェン・ギェンツェンを伴って故郷へ。[A: 3a6-, B: 4a5-]
- (8.2) 父母に再会するが, 身体の成長によって, 父母は, それが息子であるとは気が付かない。[A: 3b1-, B: 4b1-]
- (8.3) 隻眼の理由。[A: 3b2-, B: 4b3-]
- (8.4) 息子だと気が付かない父母のもとに1ヶ月ほど滞在して, 灌頂・ルン・指導を行った。[A: 4a4-, B: 5b3-]
- (8.5) 父母に息子の消息を尋ねられると, 「寺で一緒だった。ラマからの帰郷許可が得られなかった。来年は帰って来るだろう」と答えた。[A: 4a5-, B: 5b3-]
- (8.6) 父母に「この座を壊さず置いておき, 七晩たった朝に壊しなさい」と言い

4 (三宅)

- 残して立ち去った。そのとおりにすると、座から100サンほどの銀と手紙が出てきた。[A: 4b2-, B: 6a2-]
- (8.7) 手紙には、自分が息子であること、ラマの教えに違わぬため、寺に帰らねばならないこと、この銀と父母の財産を使ってセーカン (gsas-khang, 寺) を建立すべきことが記してあった。父母はそのとおりにした。この時建立されたセーカンは、今でも戒律を保った寺として栄えている。[A: 4b4-, B: 6b1-]
- (9) タルツェムド (Dar-rtse-mdo) でエンサカ寺が地震で崩壊したことを聞き、絶望、西に向かわず、そこに滞在した。[A: 5a2-, B: 7a1-]
- (10) タルツェムドで数多くの施主を得た。ツルティム・ワンデン (Tshul-khrims dbang-ldan) とソナム・オエセー (bSod-nams 'od-zer) の2人が弟子となった。護教尊の「教えを再興せよ。ここにいるな」という授記を得て、ツァンに帰る。2人の弟子は、2つの寺を築いた。現在、ラモツェパ (La-mo-rtse-pa) というのがそれである。[A: 5a5-, B: 6b5-]
- (11) エンサカ寺の跡に至る。そこで、リンチェン・ロドゥが安置した金の灯明台、ドゥチェン・キュンギェル (Bru-chen khyung-rgyal) の本尊である金写の『カム (Khams)』16巻、マンチャ (mang-ja) を召集する際のドラなどを発掘した。その感謝として、守護尊に供養をささげた。[A: 5b3-, B: 7b4-]
- (12) メンリ寺の建立。[A: 5b6-, B: 8a4-]
- (13) 定期的な儀式の創設。[A: 7a1-, B: 9b5-]
- (14) 成就法修行の成果として、種々の神々を感得した。[A: 7a3-, B: 10a3-]
- (15) チャンタンに住む遊牧民から献上された、寺院を守護するヤクの話。[A: 7a5-, B: 10a5-]
- (16) 著作リスト。[A: 7b4-, B: 11a1-]
- (17) リンチェン・ギェンツェンに僧院長の座を譲ることを宣言。以降、僧院長は、古い団子によって選ぶべきことを命ず。[A: 7b6-, B: 11a4-]
- (18) 木の女・未年、最後の説教を終えると「7日間は誰もそばに来てはいけな」と言って入り口を封印、4月8日の明け方に亡くなった。[A: 8a2-, B: 11b2-]
- (19) リンチェン・ギェンツェンが、3晩たって見に行くと、遺体は、僧衣をまといベージュを被った姿で宙に浮かんでいた。数日の間、供養を施し、荼毘に付した。ひばりの卵ほどの大きさの舍利が3個得られた。弟子たちが喜び、5色の布で包み、泉で洗っている時、舍利の1つが大音声とともに、空に飛んで行った。その様を見ている時、もう1つの舍利が大音声とともに、泉の中に落ちていった。残った1つも失ってしまうのではと思い、遺影塔を作ってその中に入れたが、夜には外に出ていた。そのようなことが何度もあったので、リンチェン・ギェンツェンが石に叩きつけた。すると舍利は石にめり込んで、取れなかった。不思議に思い、石ごと遺影塔の中に安置し、盛大に供養した。

[A: 8a4-, B: 11b4-]

(20) シェーラブ・ギェンツェンの弟子について。[A: 9b3-, B: 13b2-]

以上が『昔の教え』の内容である。次に、テンギェル所収の他2種の伝記を簡単に紹介する。

### 3. 2種の伝記

1つは

*rGyal-ba gnyis-pa shes-rab rgyal-mtshan gyi rnam-thar ngo-mtshar pad-mo'i 'phreng ba*. 第2の仏陀・シェーラブ・ギェンツェンの伝記「希有なる蓮華の数珠」(テンギェル第152, 203巻所収。以下『蓮華の数珠』。第152巻所収本をA', 203巻所収本をB')

である。コロフォンによると、著者はタクパ・ギェンツェン (Grags-pa rgyal mtshan) という人物。次に示す根拠により、彼はシェーラブ・ギェンツェンの高弟で、ギャルツァブ (rGyal-tshab) と通称されるメンリ寺第2代僧院長リンチェン・ギェンツェン (Rin-chen rgyal-mtshan) の弟子であると考えられる。すなわち

- ・ コロフォン中の「仏子無比なる大律者 (=シェーラブ・ギェンツェン) と、ギャルツァブ・リンチェン・ギェンツェン2人の御足を頭頂に戴いた多聞の僧・タクパ・ギェンツェン」という記述。
- ・ テキスト中の「と、私のラマ・ギャルツァブがおっしゃった (zhes bdag gi bla ma rgyal tshab kyis gsungs so)」[A': 28b4, B': 16a3]という記述。

以上のことから本書は、シェーラブ・ギェンツェンから数えて3代後に著わされたものであることがわかる。現在我々が眼にすることのできるシェーラブ・ギェンツェン伝として最古のもので、信頼すべき資料である。

2つめは

*rJe rin-po-che'i rnam-thar mdo-bsdus skal-ldan dñwangs-ba 'dren-byed ngo-mtshar padmo stong-ldan*. 尊者リンポチェの略伝「有縁者を清浄に導く希有なる千蓮華具足」(テンギェル第200, 203巻所収, 以下『略伝』。第200巻所収本をA", 203巻所収本をB")

である。すべて9音節からなる偈によって構成されている。コロフォンに「ゴ氏の僧院長の名を持つニリシエルシン (Nyi-ri shel-zhin) とよばれる私が」とある。これは、メンリ寺第23代僧院長ニマ・テンジン (Nyi-ma bstan-'dzin, b.1784) のことである。著作年代は記されていないが、『ニマ・テンジン伝』[276a5-277b5]<sup>⑪</sup>の記述から、それは「土の男、申の年」つまり1848年であることがわかる。

その他、ボン教史書にもシェーラブ・ギェンツェンの伝記が見える。以下、それらを年代順に列挙する。<sup>⑫</sup>

- ・ 著者不明『得道者相承伝宝鬘』17世紀中頃成書? [33b6-35b3]<sup>⑬</sup>
- ・ ロボン・ルトー・ギャムツォ (Slob-dpon Lung-rtogs rgya-mtsho) 『教源流ケタカの水晶島』1917年成書 [63b1-64a7]
- ・ シャルザワ・タシ・ギェンツェン (Shar-rdza-ba bKra-shis rgyal-mtshan, 1859-1935) 『善説宝蔵』1920年代 [264.3-267.16]
- ・ シャルザワ・タシ・ギェンツェン 『アティ相承伝白蓮華鬘』[20a6-23a2]
- ・ ペルデン・ツルティム (dPal-ldan tshul-khriims, 1902-1973) 『ボン教源流』1970年成書 [240.3-243.15]
- ・ ゲシェー・ケルサン・タルギェー (dGe-bshes sKal-bzang dar-rgyas, 1926-1989) 『白帽ボン教史善縁の首飾』[17a3-25a3]

次に、これらの資料に見られる記述を『昔の教え』と比較しながら、『昔の教え』にはいかなる特徴があるかの考察をこころみる。

#### 4. 『昔の教え』の特徴

まず、先に示した梗概から明らかなおと、シェーラブ・ギェンツェンの帰郷、父母との再会についての物語が子細に述べられている点があげられる。『蓮華の数珠』には帰郷の物語そのものがない。『略伝』は、『昔の教え』とはほぼ同内容ながら、それをわずか18句にまとめているだけである。[A": 10b4-11b1, B": 7a5-b3]

次に、エンサカ寺の崩壊原因についてである。『略伝』[A": 11b1-2, B": 7b3-4] および『善説宝蔵』[265.10-11] は「仏教徒の嫉妬によって引き起こされた洪水」が原因であるとし、『教源流ケタカの水晶島』[63b5] は「転顛した悪い真言などが縁となってエンサカの教えは尽きた」と記す。両者とも、

「仏教徒の嫉妬」や「悪い真言」という人為的作用が働いたとする点一致している。一方『昔の教え』は、「地震」という自然現象のみを原因としている<sup>⑭</sup>。興味深いことに『蓮華の数珠』は、エンサカ寺崩壊すらも記していない<sup>⑮</sup>。最古の資料にその記述がないということから、エンサカ寺崩壊は後世の仮作と考えることもできる。『昔の教え』を『略伝』以前『蓮華の数珠』以降に著わされたものと考えれば、エンサカ寺はメンリ寺の建立以降、地震という自然現象によって崩壊、後、仏教徒を意識した理由づけがなされたとも考えられる。

『昔の教え』はメンリ寺の建立を

さて、尊者は「さあ、寺を1つ建立せねばならない。どこに建立しよう」とお考えになった。その時「明日、汝の靴の落ちたところに寺を建てよ」との予言があった。「何であろう」とお考えになった時、足の裏が沈み込むほどの雪が降った。お立ちになると、靴が片方なくなっていた。探すと、1匹のメスの狐が持ち去っていた。その後を追いかけると、トブギエル (Thob-rgyal) という山麓に置いてあった。

という物語から語り始めている。狐が寺院建立の場所を示したということが何を意味するのか、ここではそこに立ち入る余裕はない。極めて興味深いエピソードではあるが、これは他書には見られない。

また、リンチェン・ギエンツェン以降の僧院長を占い団子によって選ぶべきことを命じたという記述、リンチェン・ギエンツェンがシェーラブ・ギエンツェンの舍利を石に叩き付けると、めり込んで取れなくなったという記述は他書に見られない。弟子の筆頭としてリンチェン・ギエンツェンとともに、ウゴム・シェーラブ・ギエンツェン (U-bsgom Shes-rab rgyal-mtshan) なる人物の名をあげる点も、他書には見られない。<sup>⑯</sup>

以上のように、『昔の教え』には他書に見られない多くのエピソードが記されている。ここで、他書にも見られる「隻眼」という点に視点を移し、『昔の教え』の特徴を浮き彫りにしてみよう。

## 5. 隻眼者 (sPyan-gcig-pa) シェーラブ・ギエンツェン

『昔の教え』では、父母との再会の物語の中で、シェーラブ・ギエンツェンの隻眼について次のように語っている。

テクチョク (sTegs-cog) で父母にお会いしたが、幼い頃は大寺院に行かれたので、このころには身体が成長していて、容姿も変わっていた。特に片眼は閉じて、まったく見えなかった。ある者は、前世ヤルメバ (Yar-me-ba) であった時、美しい姿に施主たる女性たちが愛欲を抱いたので、これを嫌って、感覚器官が不完全であるという態を示されたという。ある者は、悪趣への入り口を断ずるためにそのようななされたという。幼い頃、鳥によって突かれたという福德のない者たちの説や、木片で傷付いたという邪教徒 (am-tshod-pa) の説がある。これらはまったく正しくない。

ここでは、隻眼の理由として4つの説が記され、かつ、その正誤の判断が行われている。

さて、他書は隻眼についていかに語っているだろう。『蓮華の数珠』は、シェーラプ・ギエンツェンの誕生について記したのち [A': 3a4-b1, B': 2b1-2]

さて、母のわずかの不注意の結果、片眼を水草の小片で刺してしまったので、後、偉大なる隻眼教師と称せられた。

と、『昔の教え』が「正しくない」と否定した説を説く。一方『略伝』は [A": 10b4-11a2, B": 7a5-6] 「大金川地方にお越しになった時、顔がわからないよう変化なさって」とするものの、隻眼については触れていない。では、『略伝』の著者ニマ・テンジンがシェーラプ・ギエンツェン隻眼説を知らなかったかといえば、そうではない。彼は、シェン・ニマ・ギエンツェン (gShen Nyi-ma rgyal mtshan)<sup>⑩</sup> が書きあらわした『ナムギェル・カンサン』という、シェーラプ・ギエンツェン讚に対する注釈を著わしている。その中、「五明を御覧になる隻眼者 (rig pa'i gnas lngar gzigs ba'i sryan gcig pa)」 [『ナムギェル・カンサン』 4b5] の1句に対する注釈を見てみると、「隻眼者」の部分にのみ何の注釈も施していない [『ナムギェル・カンサン注』 17a6-18a5]。隻眼ということを見捨てるかのような態度である。

他の資料ではどうであろうか。『教源流ケタカの水晶島』は、『蓮華の数珠』と同じ説を紹介する。シャルザワは『善説宝蔵』および『アティ相承伝白蓮華鬘』において、隻眼については語らない。しかし、加行のテキストである『教えの海』において善業を説く際、次の物語を喩えとして記す。

[213.4-10]



そのように尊者隻眼者メンリパ御自身が昔、シャンシュンでセネガウに生まれた時のことである。ツォメン・ゲルモと幻術競べをなされた。その時、蛇に化けて現われたツォメン・ゲルモの眼に、楽器・シャンの先を当てて蛇の目玉を傷つけた。それ故、後、母のわずかな不注意と、以前ツォメン・ゲルモの眼を傷つけたことの果報として、水草の小片が縁となって、片眼が傷つけられたので、隻眼教師と称せられる。

ツォメン・ゲルモの眼を傷付けたという『昔の教え』とは別の前世譚と、母の不注意により眼を傷付けたという説が、因果という形で理論化されている。

著作年代および著者不明の『如意宝珠蔵』というラマ成就法のテキストがある。その冒頭に [3b4-7a6]、成就対象であるシェーラプ・ギェンツェンの伝記が紹介されている。その中で「その因、縁、真実の3つのありさまを述べる」とし『教えの海』同様の物語を述べ上で [5b1-2]

真実は次のとおりである。雪山国チベットにおいて、学者にして成就を得たすべての者の中で自在者の中心の眼のような方であり、尊者リンポチエ *spyan-gcig-pa* と称せられる。これが真実である。

と意味付けがなされている。ここでの *spyan-gcig-pa* の意味は「隻眼」ではなく「自在者の中心の眼のような方」つまり、「唯一の眼のような大切な方」あるいは「真実を見通す唯一の眼を持つもの」と解されるべきであろう。翻って考えればラマは実際は隻眼ではないと言いたいのであろうか。一方『昔の教え』は4説の紹介と正誤の判断の後

ある供奉者が彼（シェーラプ・ギェンツェン）に対して、「ラマは盲人だ」と陰口をたたいた。（彼はそれを）見透かしなさって、自分の前に呼びよせて、次のようにおっしゃった。「お前は私を盲人だという。（そう言われても）私は傷付かない。だが、お前が仏果を得る為に、私はお前に眼を示すので見よ」そうおっしゃると、片眼を見開いた。（供奉者は）左右の眼に違いがないのを見たという。

と実際は両眼とも見えたというエピソードを記しているが、『如意宝珠蔵』のような意味付けはしていない。

以上のように隻眼という点から見ると、シェーラプ・ギェンツェンの伝記は

(1)ただ「母の不注意により…」とするもの。

(2)多くの説を紹介するもの。

(3)隻眼について闕説しないもの。

の3グループに区分できる。(1)には『蓮華の数珠』が属す。『昔の教え』は(2)に属すが、『教えの海』のように隻眼の理由を理論化しようとはしていない。また「両眼とも見えた」というエピソードを記すものの、『如意宝珠蔵』のように、それが「真実」であるとは断じていない。淡々とエピソードのみを記している点に『昔の教え』の特徴が見て取れよう。

## 6. 結 び

以上のように『昔の教え』は、帰郷から父母との再会にいたる物語に多くの紙幅を割くなど、テーマ・力点をはっきりしている。かつ他書にない伝承を多く記す。これが著者の執筆の意図および動機に深く関わっていると思われる。最古の『蓮華の数珠』と比べ、エンサカ寺崩壊など新たな物語が追加されている一方、『略伝』に比べ、ツォンカパとの詩の交換 [A': 7b1-5, B": 5a6-b3] や、シェン・ニマ・ギェンツェンとの幻術競べの物語 [A": 8b4-9a3, B": 6a3-5, A': 17a2-61, B": 11a1-4] が無い。この点から、『昔の教え』は、『略伝』以前『蓮華の数珠』以降の伝記形成過渡期に著されたものであらうと考えられる。しかしながら『蓮華の数珠』『略伝』両書にある物語、たとえば、あるゾンで灌頂を与え、後、そのゾンが襲撃された際、灌頂を受けた者は傷付かなかったといった物語 [A': 29a2-b2, B': 16a5-b3, A": 9b1-5, B": 6b2-4] は『昔の教え』には見られない。隻眼という点について言えば、『蓮華の数珠』が「母の不注意によって…」という説—おそらくこれが事実なのであらう—のみを記した後、様々な説が提起され、実際は両眼とも見えたといった説までが展開される。そのような中で『昔の教え』は書かれた。ニマ・テンジンがその著作の中で隻眼を無視していることは注目に値する。彼による『略伝』は、転生譜を付すなど極めて特徴的である。この時代、氏姓カリスマであるドウ氏がその本拠地トプギェー谷を去り、教義学道場としてのユンドゥンリン寺が建立(1834年)され、組織の再編成と、それにともなう新たな祖師像が求められたのであらう。それに抗うように、書かれなかった伝承を伝えるため著わされたのがこの『昔の教え』であらう。題名にそうした著者の意図があらわされているように思われる。

**付記** 本稿作成にかかわるチベット現地調査には、平成13年度科学研究(基盤A2)「シャンシュン語の再構とチベット文語形成に関する総合的研究」(研究代表: 国立民族学博物館・長野泰彦教授)からの研究費を得た。記して謝したい。また、種々の情報を与えてくれたボン教僧、時にシェーラブ・テンジン、ティメー・オェセル両師に感謝する。

\* [5. 隻眼者 (sPyan-gcig-pa) シェーラブ・ギェンツェン] について: 「真実」としての「両眼」という意味付けは、隻眼の方が劣っているという思考から生み出されたものであろう。この意味付けの過程を追って行く考察自体が、こうした差別意識に搦めと捕らえられているのではないかと、本稿提出後考えた。この点、諸賢の意見を仰ぎたい。

### 参考文献

sKal-bzang dar-rgyas, dGe-bshes (1926-1989)

『白帽ボン教史善縁の首飾』 *Zhwa-dkar bstan-pa'i lo-rgyus ke-ta-ka'i phreng-mdzes skal-bzang mgul-rgyan*. n.d.

bKra shis rgyal mtshan, Shar-rdza-pa (1859-1934)

『アティ相承伝白蓮華鬘』 *Man-ngag rin-po-che a-khrid-kyi bla-ma brgyud-pa'i rnam-thar padma dkar-po'i phreng ba*. 45 fols. in the 13th volume of his collected works recently published by the Zung-chu-rdzong shar-dung-ri shes-rig dpar-khang.

『教えの海』 (*Man-ngag rin-po-che a-khrid thun-mtshams bco-lnga-pa'i sNgon-'gro'i khrid-rim bka'-lung rgya-mtsho*). Si-khron mi-rigs dpe-skrun-khang, 2000.

『善説宝蔵』 *Legs-bshad rin-po-che'i gter-mdzod*. Mi-rigs dpe-skrun-khang, 1985. cf Karmay 1972.

Graggs pa rgyal mtshan

『蓮華の数珠』 *rGyal-ba gnyis-pa shes-rab rgyal-mtshan gyi rnam-thar ngo-mtshar pad-mo'i phreng ba*. テンギュル第152, 203巻所収。

Nyi-ma rgyal-mtshan, gShen

『ナムギェル・カンサン』 *Rje-rin-po-che'i bstod-pa rnam-rgyal khang-bzang*. A-mdo Shar-khog Rin-spungs ed.

Nyi-ma bstan-'dzin, mKhan-chen (b.1813)

『律疏宝鬘』 *rNam-dag 'dul-ba'i rnam-bshad nor-bu'i phreng-ba*. 37 fols. 1836年成書。

『略伝』 *rJe rin-po-che'i rnam-thar mdor-bsdus skal-ldan dwangs-ba 'dren-byed ngo-mtshar padmo stong-ldan*. テンギュル第200, 203巻, *Shar-rdza-ba'i gsung 'bum* vol.16 所収。1848年成書。

『ナムギャル・カンサン注』 *mNyam-med chen-por bstod-tshig rnam-rgyal khang-bzang yon-tan bang-mdzod-kyi 'grel nyung-thus kun-gsal lde-mig*. *mNyam-med gsung-'bum* vol. 5 所収。1860年成書。

dPal-ldan tshul-khrims (1902-1973)

『ボン教源流』 *g Yung-drung bon-gyi bstan-'byung phyogs-bsdus*. Bod-ljongs mi-dmangs dpe-skrung-khang, Lhasa, 1988.

Lung-rtogs rgya-mtsho, Slob-dpon mkhas-grub

『教源流ケタカの水島』 *bsTan-'byung rig-pa'i shan-'byed nor-bu ke-ta-ka'i do shal*. MSS, 76 fols. 1917年成書。

Anon.

『如意宝珠蔵』 *rJe rin-po-che'i nang-sgrub yid-bzhin nor-bu bsam-pa skang-ba'i gter-chen*. 40 fols. テンギュール第17巻所収。

『ニマ・テンジン伝』 *dPal gshen-bstan sman-ri'i mkhan-po sgo-ston nyi-ma bstan-'dzin dbang-gi rgyal-po'i rnam-thar legs-bshad nyi-ma 'bum-gyi 'od-can 'gro-kun blo-man sel-ba'i sgron-me*. テンギュール第90巻所収。

『得道者相承伝宝鬘』 *rTogs-ldan nyams-brgyud-kyi rnam-thar rin-chen phreng-ba*. typographical edition, n.d..

Dondrup, Lhagyal

2000 “Bonpo family lineages in Central Tibet”, in Karmay and Nagano 2000, 429-508.

Karmay, Samten G.

1972 *Treasury of Good Sayings: A Tibetan History of Bon*. (London Oriental Series volume 26), Oxford University Press, London.

1977 *A Catalogue of Bonpo Publications*. The Toyo Bunko, Tokyo.

Kværne, Per

1971 “A Chronological Table of the Bon po: The Bstan tsris of Nyi ma bstan 'dzin.” *Acta Orientalia*. 33

1973 “Bonpo studies: The A-khrid system of Meditation” *Kailash* (Kathmandu), Vol.1, No.1, Part 1, 19-50; No.4, Part 2, 247-332.

1990 “A Bonpo Bstan-rtsis from 1804.” Skorupski, T (ed.), *Indo-Tibetan Studies: Papers in Honour and appreciation of Professor David L. Snellgrove's contribution to Indo-Tibetan Studies*. (Buddhica Britannica Series Continua 2), The Institute of Buddhist Studies, Tring, U.K., 151-169.

1995 *The Bon Religion of Tibet: The Iconography of a Living Tradition*. Serindia Publications, London.

2000 “The study of Bon in the West: Past, present and future”, Karmay and Nagano 2000, 7-20.

Karmay, Samten G. and Nagano, Yasuhiko

2000 *New Horizons in Bon Studies*, Bon Studies 2, (Senri Ethnological Reports 15), National Museum of Ethnology, Osaka.

bSam-gling-ba, Phun-tshogs nyi-ma

1997 “rJe mnyam-med-pa dang rong-ston gnyis-kyi-bar ’brel-ba byung-tshul-la dpyad-pa”, *Bon-sgo* (Bon Cultural Center) vol. 10, 45-50.

Tshe-ring bkra-shis, A-sngags

1995 *mKhas-btsun dam-pa skal-bzang dar-rgyas-kyi rnam-thar*.

## 注

- ① ボン教 (bon, bon-po) といった場合、その包括する範囲は広い。Kværne 氏は、ボン教を4つに分類している。すなわち、1) 仏教伝来以前の土着の宗教。2) 仏教をふくめたインドの宗教や、イランの宗教に影響を受け、特に王に焦点を当てた組織化されたチベット・シャンシュンの王室信仰。3) 現在の民俗信仰、スタンの言う「無名の宗教 (“nameless” folk religion)」、山に住む領土神 (yul-lha, gzhi-bdag) に対する信仰。4) 11世紀以降の組織化され、ユンドウン・ボン (g-yung-drung-bon) すなわち「永遠なるボン」を自称する宗教 [Kværne 2000: 16-17]。本稿でボン教という場合、第4のものを指す。
- ② シェーラプ・ギェンツェンの生没年代については、1356-1415 と 1416-1475 の2説ある。cf. Kværne 1971, Kværne 1990b。一般的には前者の説が支持されているようである。
- ③ 管見の限り、仏教側の資料にシェーラプ・ギェンツェンに関する記述は見出せない。歴史上の彼の活動を再構成する際注意すべき点である。
- ④ ティメー・オエセル師は、3句目の gshen gdung を「シェン氏の家系」と解釈し、本書がシェン氏に連なる者の著作であるとした。しかし、そのような解釈をすると、直前の bon dga' と対応せず、句全体のリズムが崩れてくる。したがって、師の解釈をとらなかった。
- ⑤ ユンドウンリン寺 (g-Yung-drung-gling) のゲロン・シェーラプ・テンジン (dGe-slong Shes-rab bstan'dzin) 師は、リンチェン・ギェンツェンが著者であるという。しかし、テキスト末尾に弟子の筆頭としてその名が記されていることから、これを著者とは考えがたい。リンチェン・ギェンツェンの言葉を、弟子の誰かがまとめたものであるかも知れないが、確定はできない。なお、写本Aの末尾には、筆写者による次のようなコロフォンが付されている。

ces ??? po ti'i gra sa sdeb ma sum brgya yod pa 'di yang lcags rta zla ba 12  
pa'i tshes 5 la rtsa bla bzod pa rgyal mtshan thugs dam dad rten du sdong  
rdzong mdun zhol gser gzhong sa gnas su phran sprang po 'khyams pa  
she tsu rad dnas gu ge ris su hrud pas ma 'gyur 'gro drug sems can thams  
cad sangs rgyas pa'i rgyu ru gyur cig / bkra shis par shog / zhus so /

- ⑥ 彼の伝記はテングル第203巻に *mKhas-grub rinzhen ble-gres kyi rnam-thar* と題するものが、また『得道者相承伝宝鬘』32b6、『アティ相承伝白蓮華鬘』19b1-

に見える。

- ⑦ ドウシャ・ジェツン (Bru-sha rJe-btsun) により11世紀に建立されて以降ドウ (Bru) 氏により相承されてきた寺院で、メンリ寺建立以前最大規模を誇っていたといわれる。cf. Dondrup 2000: 445-452
- ⑧ ナーランダ寺は、ロントン・シェーチャ・クンリク (Rong-ston Shes-bya kun-rig, 1367-1449) により1435年に建立された。シェーラブ・ギェンツェンの生没年を1356-1415とすると、シェーラブ・ギェンツェンがこの寺で修行し、ロントンから教えを受けたという伝承は、Karmay氏も指摘するとおり、年代的に矛盾する [cf. Karmay 1972: 141, n.2]。なおロントンは、シェーラブ・ギェンツェン同様ギャロン地方の出身でありかつ、ボン教徒の家庭に生まれた。一般にロントンの生没年代は1367-1449とされているが、ニマ・テンジンは1345-1429とし、一致しない。bSam-gling-ba 1997 は、『蓮華の数珠』の記述およびシェーラブ・ギェンツェンの師・リンチェン・ロドゥも教えを受けたという伝承から、ロントンの生没年代はニマ・テンジンの説に従うべきであるとする。たしかに最古の伝記である『蓮華の数珠』の記述は信頼すべきであるが、以下の点に注意したい。『蓮華の数珠』は、ロントンの「シェーチャ・クンリク」という実際の名前を記さず rong-ston-pa とのみ記している。rong-ston の rong をウメー体で記した場合、drong と区別しにくい。drong は、drang-srong の縮約文字と読める。したがって、drang-srong が筆写の段階で縮約文字化され drong となり、それが rong と間違っ読まれた、つまり、rong-ston-pa は drang-srong ston-pa の誤読である可能性がある。
- ⑨ タクバ・ギェンツェンについて、これ以上の情報は得られない。
- ⑩ Zung-chu-rdzong shar-dung-ri shes-rig dpar-khang から出版された16巻からなる活字版 *Shar-rdza-ba'i gsung 'bum*. vol.16 にも収められている。
- ⑪ ニマ・テンジンは『略伝』以前、1836年に著した『律疏宝鬘』[21b6] にもシェーラブ・ギェンツェンの伝記を記している。内容は『略伝』と変わらない。
- ⑫ シェーラブ・ギェンツェンの予言を含めた伝記があったといわれている。(2001年9月、ユンドウンリン寺シェーラブ・テンジン師より聞く)。また、20世紀初頭に描かれた彼の伝記を絵画化した「mNyam-med 'dul-thang」とよばれるタンカが、アムド・シャルコク地方のキャンツァン (sKyang-tshang) 寺に現存している。cf. Kværne 1995: 135.
- ⑬ アティの相承者の伝記である本書は、コロフォンはないが、伝統的にドウ・ギャルワ・ユンドウン (Bru rGyal-ba g-yung-drung, 1240-1290) の著作であるとされている [Karmay 1977: 111]。しかし現行テキストには、彼自身および以降の伝承者の伝記も収められている。これらは、後世付け加えられたものであろうと思われる [Kværne 1972: 20]。最後の伝記はニマ・オエセル (Nyi-ma 'od zer, 1563-1637) のものであるから、現行テキストは彼の弟子の時代—17世紀中頃—

に完成したものと思われる。なお、『蓮華の数珠』は『アティ伝 (A-khrid-kyi rnam-thar)』なる書を参照したとする [A': 37a2, B': 21a2]。これが『得道者相承伝宝鬘』であるなら、シェーラブ・ギェンツェンの伝記が付されたテキストが、彼の没後、かなり早い段階に成立していたと考えられる。

⑭ Dondrup は、再建されなかったという点から、洪水による崩壊を疑う。cf. Dondrup 2000: 452.

⑮ 『得道者相承伝宝鬘』にも帰郷およびエンサカ寺崩壊の記述がない。

⑯ この人物についての子細は不明。なお他書は、シェーラブ・ギェンツェンの筆頭の弟子としてリンチェン・ギェンツェンとともにガリ・ソナム・ギェンツェン (mNga'-ris bSod-nams rgyal-mtshan) をあげる。

⑰ 彼の伝記として、テンギユール第142巻に下記のもの収められている。

Mi-'gyur gtsug-phud dbang-rgyal (b.1751), *dMu-gshen lha-yi gdung-rgyud nyi-ma rgyal-mtshan-gyi rnam-thar mos-ldan thar-pa'i lam 'dren*, 15 fols.

『ナムギェル・カンサン注』にも彼の伝記が見られる [40a6-]

⑱ 『如意宝珠藏』は、シェーラブ・ギェンツェンの出家の際の戒名をユンドゥン・ギェンツェン (他書は俗名とする)、タンソン戒を受けた際の戒名をシェーラブ・ギェンツェン (他書は出家の際の戒名とする) としている点、注意が必要である。

(元本学特別研修員 チベット学)